

序

— 監修にあたって —

道徳教育の目標は、生命に対する畏敬の念に根ざした人間尊重の精神、豊かな心、伝統と文化を尊重し我が国や郷土を愛する心、公共の精神、世界の平和と人類の幸福を願う心等を培い、育むために、学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度等の道徳性を養うことであると言われている。

個人的な見解の域を出るものではないが、監修者は、21世紀の学習・教育の在り方について検討するためにユネスコが設置した21世紀教育国際委員会によってまとめられた報告書『学習：秘められた宝』の中で示されている「学習の4本柱」になぞらえて、道徳教育の目標のひとつを、「共に生きることを学ぶ」(Learning to live together, Learning to live with others) ことと捉えたいと思う。

医師でもある作家、海堂尊の作品に、『極北クレイマー』（きょくほくクレイマー、朝日文庫、2011年）という小説がある。『極北クレイマー』の舞台は、財政難に苦しむ北海道極北市にある市民病院である。そこに勤務する医師・中今良夫が目撃する病院のずさんな実態が描かれている。「地域医療の在り方」がテーマとなっている小説であるが、その中に、次のような一節がある。

「地獄にはご馳走があり、長い箸が用意されている。それは長すぎて、自分の口に入れない。だから亡者たちは、目の前に食べ物があるのに、飢えて争う。これが地獄です。天国は地獄の隣にある。天国にもご馳走があり、地獄と同じように長い箸が用意されている。そう、実は天国は地獄と変わらない。」「天国では、長い箸で他人に食べさせてあげている。そして自分も他人に食べさせてもらう。地獄の亡者は自分のことしか考えない。だからご馳走を前にして飢えて争う。」

（『極北クレイマー』下、朝日文庫、2011年、p.228）

私たちは、物にあふれた、一見、「天国」のような社会に生きている。しかし、その社会は本当に「天国」なのであろうか。「長い箸で他人に食べ物を食べさせてあげ、自分は他の人から長い箸で食べ物を口に入れてもらう」ような、「あてにし、あてにされる人間関係」や「つながり」、「絆」を、私たちは蓄えてきてい

るであろうか。私たちの社会は、実は、そうした「人間関係」が希薄化した「地獄」なのではないか。

東日本大震災を経て、多くの人びとが改めて人と人との「つながり」の重要性を再認識する中で、家族や地域・職場等の人と人との「絆」を見直し、構築することにより、人與人、心と心の「つながり」を強化していくことが喫緊の課題となっている。すなわち、「顔の見える距離における、あてにし、あてにされる関係」＝「ソーシャル・キャピタル」(social capital 社会関係資本)の蓄積である。今や、「人間関係」・「つながり」・「絆」、すなわち、「ソーシャル・キャピタル」は、私たちの中に、また、地域に必ず装備しておくべき、文字通り「資本」(キャピタル)、つまり、私たちが学習・教育を通じて獲得すべき「知」のひとつとして捉えられている。「運」も実力のうち、「縁」も実力のうち」とは、よく言ったものである。私たちは、「一緒に何かに取り組んだ」という「共同体験・共有体験・成功(失敗)体験」を積み上げる中で、相互の信頼感や安心感を高め、自身の中に、また、地域に「ソーシャル・キャピタル」を蓄えていきたいものである。

さて、この「ソーシャル・キャピタル」等の基盤となる道徳性を養うのが道徳教育で、その要が道徳の授業であると言うこともできるであろう。そして、「道徳の時間」が、「特別の教科『道徳』」として位置づけられる。本書の目的は、「特別の教科『道徳』」を充実させるために、道徳の授業における教師の悩みについて考究し、その課題解決の方略を検討することにある。本書が「特別の教科『道徳』」に向き合う教師のみなさんにとって有益なものとなることを期待している。

岐阜大学地域協学センター長・教授

益川 浩一(監修者)

はじめに

前の話になるが2004（平成16）年5月8日の産経新聞に「道徳教育効果あり」¹⁾という記事が掲載された。主な内容は「道徳の授業の充実が、暴力行為など生徒指導上の課題解決に効果があり、その効果が学力向上にも波及している」である。これを読み道徳の授業に対する「世間の認識がよくなればいいな」²⁾と、思ったことを記憶している。本稿を始めるにあたって、筆者が道徳の研究にこだわるきっかけとなった体験を記したい。

残念ながら、筆者が以前勤務した学校は、道徳の授業は片隅に追いやられ、日常の生徒指導に追われた中学校である。その都度対処するものの解決に向かわない。職員で議論を重ねた結果は、個々の問題に対応しつつも、「元気をだして面白い授業をやろう」である。そこで、1997（平成9）年、元文部省教科調査官の横山弘弘氏に、「心が荒んでいる生徒に、生き方をみつめさせたい」と、道徳の授業の指導を依頼した。資料は、「足袋の季節」。北海道の話で、足袋を買うこともできない苦しい境遇の主人公が、大福餅を買いに行く。売っているおばあさんが釣り銭を間違えるが、主人公は足袋を買いたい一心で、ごまかしてその釣り銭を受け取ってしまう話である。その授業には、いつもは授業を放棄している生徒B（3年）も参加した。しかし、態度は相変わらず横柄で、足を投げ出し腕組みをしている。

終了後の協議会で、元調査官から、「ところで先生方は、問題のB君が、寝たふりをしながら、みんなの発言に耳を傾けていたことを分かっていましたか。友達の面白い意見がでると微妙に身体が揺れる。何も、お利巧な格好をしている子ばかりが良いわけではない」「例えば数学の時間に分数も分からない生徒が、1時間も座って、じっとしているのは苦痛ですよ」と指摘を受けた。この協議会から考えさせられたことが2つある。1つは「寝ている生徒」から「寝ながら耳を傾けている生徒」というように、多面的に生徒を理解することの重要性。2つ目は、「道徳は学力差を気にせずに、誰でも参加できる」ということの再認識である。それ以後、学校は道徳の授業を大切にする取り組みをきっかけに、立ち直っ

ていったのである。この体験以後、筆者は、以前に増して道徳教育の重要性を痛感してきた。

さて、その「道徳の時間」が教科となった。しかし、教科であろうとなかろうと学校における道徳教育の要であることに変わりはない。授業を充実させることこそが、我々教師の使命である。では、「特別の教科としての道徳」を充実させるためにどうすべきだろう。今回の「特別の教科としての道徳」は、「道徳の時間」の多くを踏襲し、基本理念は変わっていない。そのために、従来の「道徳の時間」の課題は、「特別の教科としての道徳」のものでもある。そこで、本研究では、道徳の授業における教師の悩みを出発点とし、その解決を図ることにより、「特別の教科としての道徳」を充実させるための示唆とすることを目指した。

愛知県東海市立加木屋中学校長

前田 治（著者）

注

- 1) 広島県教育委員会の実践
- 2) 詳細は、藤本嘉江「道徳教育研究を推進していくための役割と働きかけの実際（広島市立日浦小学校）」（『道徳教育方法研究第12号』日本道徳教育方法学会（2006）p.107～）にまとめられている。

道徳の授業における教師の悩みに関する研究

目 次

序—監修にあたって—	i
はじめに	iii

理論編（研究Ⅰ） 道徳の授業における教師の悩み

序 章 研究の方法	2
第1節 問題の所在	2
第2節 予備調査	5
Ⅰ 調査手順	5
Ⅱ 調査項目	5
Ⅲ 調査時期・調査対象・経験年数分布	6
Ⅳ 予備調査の結果	6
第3節 研究の目的・方法・立場・対象	10
Ⅰ 研究の目的	10
Ⅱ 研究の方法	11
Ⅲ 研究の立場	11
Ⅳ 研究の対象	11
第1章 道徳教育・道徳の授業の定義	13
第1節 道徳教育と道徳の授業の関係	13
第2節 道徳教育と道徳の授業の定義	15
第3節 道徳の授業により「子供が善くなる」という意味	16
第2章 道徳の授業の悩み	18
第1節 研究の目的と方法	18
Ⅰ 研究の目的	18
Ⅱ 研究の方法	19
第2節 自由記述から見えてきた道徳の授業の悩みの整理	19
Ⅰ 自由記述の整理方法	19

II	悩みに関連する内容の抽出	19
III	道徳の授業の悩みの分類と整理	21
第3節	悩みの度合いの調査	25
I	調査手順	25
II	調査時期・調査対象・経験年数分布	26
III	調査項目	26
IV	調査の結果と分析	31
V	悩み調査のスケールについて	37
第4節	道徳の授業における悩みの実態	48
I	悩みの項目数	49
II	カテゴリー別、教師の悩みの実態	49
第3章	道徳の授業の難しさの原因	53
第1節	研究の目的と方法	53
I	研究の目的	53
II	研究の方法	54
第2節	各時期の道徳教育の論争の整理	57
I	道徳教育の型	57
II	道徳教育の型からみた「全面主義道徳」と「特設道徳」の定義	58
III	明治期の道徳教育論争	59
IV	大正期の道徳教育論争	63
V	昭和期（戦前・戦中）の道徳教育	69
VI	戦後の道徳教育論争	73
第3節	道徳教育論争の結果の整理	88
I	明治期の論争の結果	88
II	大正期の論争の結果	89
III	昭和期（戦前・戦中）の論争の結果	89
IV	昭和（戦後）の論争の結果	90
V	まとめ	90
第4節	「道徳の時間」の位置付け	91

I	道徳教育の型からみた位置付け	92
II	道徳教育の指導方法からみた位置付け	92
第5節	「教科道徳」の位置付け	94
第4章	道徳の授業の難しさの正体	99
第1節	研究の目的と方法	99
I	研究の目的	99
II	研究の方法	99
第2節	「道徳の時間」の位置付けから生まれる難しさの考察	100
I	道徳教育の型から生まれる難しさ	100
II	道徳教育の指導方法から生まれる難しさ	101
III	「道徳の時間」の特殊な位置付けから生まれる難しさとその考察	102
IV	「道徳の時間」と教科の授業との違いから考えられる難しさとその考察	103
第3節	まとめ 道徳の授業の難しさの正体	105
第5章	道徳の授業の難しさと悩みの関連	107
第1節	研究の目的	107
第2節	「悩み追求型」の教師の悩みとの関連	108
I	道徳の授業の難しさの正体と悩みの照らし合わせ	108
II	「道徳の時間」の特殊な位置付けから生まれる難しさとの関連	109
III	「道徳の時間」と教科の授業との違いから考えられる難しさとの関連	114
IV	難しさ1～4に位置づけられない悩み	116
V	まとめ 悩みの解決に必要な改善の視点	118

理論編（研究Ⅱ） 道徳の授業における教師 T の課題解決

第1章	教師 T の道徳の授業における課題の解決方法の追究	120
第1節	研究の目的と方法	120
I	研究の目的	120

II	研究の方法	121
第2節	教師 T の悩みの実態	122
I	調査方法（質問紙法と面接法）	122
II	インタビューの留意点	123
III	調査時期・調査対象・経験年数	123
IV	調査の結果と分析	123
第3節	教師 T の悩みを課題へ	127
I	悩みについてのインタビュー結果	127
II	教師 T の課題	129
第4節	教師 T の道徳の授業における課題の解決方法	132
I	課題1に対する解決方法	132
II	課題2に対する解決方法	133
III	課題3に対する解決方法	134
IV	道徳の授業の悩みを解決するための改善点と教師 T の課題1～3の解決方法	135
		135
第2章	解決方法の実践（授業研究）	137
第1節	研究の目的と方法	137
I	研究の目的	137
II	研究の方法	137
第2節	道徳の授業の定義の確認と基本とする学習過程の合意	138
第3節	課題の解決方法と評価表	140
第4節	評価表活用による授業の実際	142
I	公開した授業と分析対象授業	142
II	教師 T の自己評価の結果	143
III	まとめ 中心発問等の評価の推移より	151
第5節	逐語記録による授業分析の実際	153
I	逐語記録による授業分析の意義	153
II	逐語記録による授業分析の観点	154
III	対象とする授業	155

- IV 逐語記録による授業分析 155
- V 授業分析から見えてくること 162

第3章 研究Ⅱのまとめと今後の課題164

- I 研究Ⅱのまとめ 164
- II 今後の課題 168

資料 授業記録169

理論編（研究Ⅲ） 道徳の授業における教師の悩みの解決に向けた取り組み

第1章 研究Ⅲを論ずるにあたって186

第2章 悩みの解決に向けた具体的な取り組み191

- 第1節 研究の目的 191
- 第2節 研究の方法 193
- 第3節 研究内容に使われる語句の説明 194
- 第4節 研究の内容 195
 - I 内容項目の解釈のために 195
 - II 深い読み取りに基づく資料解釈 201
 - III 中心発問として取り上げる箇所と発問内容の吟味とその結果 211
 - IV 道徳の授業以外における普段の子供の見取り 224
- 第5節 研究のまとめ 238
 - I 研究のまとめ 238
 - II 研究Ⅲを終えて 240

資料編243

実践編 道徳の授業における教師の悩みの解決に向けた実践

実践をはじめるにあたって	268
I 本校の教師は道徳の授業の何に悩んでいるの?	269
II 意識調査結果の考察	270
III 悩みの解決策	271
IV 掲載した実践	275
V よりよい授業にするために 実践者の振り返りより	346
VI 講師の先生からのアドバイス	349
VII よりよい授業にするために 授業実践からのまとめ	352
実践を終えて よりよい授業をしようともがいている	354
 資料編	 355
 おわりに	 365
引用・参考文献	367
謝 辞	369